

九州大学

大学文書館ニュース

第40号

2017. 2. 28

目 次

ある少年の戦後の記録 …………… 2	九州大学大学文書館委員会名簿 …………… 7
九州大学セツルメントと吉本清一氏資料 …… 5	大学文書館日誌抄録 …………… 8
九州大学大学文書館名簿 …………… 7	百年史編集室日誌抄録 …………… 12



「九州大学セツルメントによる乳幼児健診」(1956年)

九大セツルメントは福岡市堅粕および馬出地区において、各町内会・子供会・青年団らと協力してしばしば集団健診を行い、衛生意識の向上に努めた。この写真は1956(昭和31)年に旧吉野町公民館において開催された乳幼児健診の様子と思われる。開催に当たっては町内紙、ポスター、チラシなどで案内を出し、約200世帯に向けて広報活動が行われた。健診は小さい子どもが対象であるため、会場では工夫が見られた。看護婦は健診を嫌がる子どもの気を引こうとお面をつけたり配付したりし、また健診を終えた子ども達には風船、鉛筆、うちわなどの「ごほうび」が渡された(写真中央やや左の張り紙)。このほか母親向けに離乳指導も行われ、好評を博したそうである(九大セツルメントの詳細は本文の赤司友徳「九州大学セツルメントと吉本清一氏資料」を参照)。

ある少年の戦後の記録

三 島 美佐子

2016年8月末、旧工学部本館1階の廊下を歩いていて、ふと足を停めた。ここの壁は、こんなに賑やかだったろうか？九州大学大学文書館の向かいの掲示板である。大学の史料館や、公共の文書館などが主催する展示のポスターがひしめいていた。以前もここに掲示されていた展示ポスターが目に入り、開催期間中にたまたま東京出張が入ったため、その展示を見に行っていたことがあった。その時にはせいぜい2、3枚のポスターがあっただけのような気がする。

この壁に掲示されていたポスターがきっかけで訪れた展示とは、2016年6月に学習院大学史料館の展示室で開催されていた、「戦後学習院の出発」というものであった。この展示に足を運んだ理由のひとつは、昭和7年生まれだった筆者の実父が、学習院大学で学んだ、と聞いていたからである。

*

学習院といえば、真っ先に皇族の子女が思い浮かぶし、戦前なら華族が通っていたような、ちょっと上流社会向けのイメージがある。しかし実父は、ごく普通の子沢山の庶民の家の子で、戦争が始まる頃にはすでに結核や栄養不良で、両親も7人いた兄弟姉妹のほとんども亡くし、幼い妹と二人きりになってしまっていたという。父の妹つまり筆者の叔母は、「母が亡くなったときのことは全然覚えていないんだけど、ただただ、悲しかったってことだけ、覚えているの。今でも本当に悲しくなるのよ。」と言っていた。兄妹は彼らの叔父に引き取られたが、その叔父は、たいてい仕事もせず飲んだくれており、料理人をしていた長男が家計を支えていたらしい。

幼い兄妹が何故そんな飲んだくれの叔父のところにやっかいになることになったのか、という話は、父から何度か聞かされた。元々父の一家は、祖父母の代に広島から移住してきており（だから、親戚の中には原爆で亡くなっている人も多いという）、本家筋にあたる遠い親戚も都内にあったらしい。兄妹が遺されたとき、その本家筋の大きな家の和室で、それこそ床の間を背にした家長



大学文書館事務室向かいの掲示板

を中心に、長い座卓にずらりと親類縁者が並ぶような家族会議が行われたらしい。妹の方は「女の子で家の手伝いなどに役に立つから」と、すぐに引き取りの手があがったが、兄の方は、皆なかなかもらいたがらなかったようだ。「このときはほんとうに悔しかったねえ」、と父は言っていた。そんな時、その飲んだくれの叔父が、こんな幼い兄妹を離ればなれにするなんざあかわいそうだろう、そんなら俺が面倒見てやらあ、とタンカを切ったらしい。みんな慌てて無理だと止めたらしいが、その叔父は、兄妹を連れてさっさと出て行ってしまった。「まあそれで良かったような、悪かったような・・・」と遠い目で語る実父もややふざけたところのある人だったから、かなり脚色が入っていたり、なにかのドラマと記憶がすりかわっていたのかもしれないが、確かに戦前の日本なら、そんな場面があったかもしれないと思わされる。実際のところは、全然良くはなかったようで、父は飲んだくれの叔父の家をすぐに飛び出て、戦中戦後の混乱の中をどうにかこうにか、生きながらえたらしい。

どう食いつないだか、という話も、具体的な時期や期間は不明確なもの、筆者は時々父から聞かされた。路上で知り合い、つるむようになった仲間達と、使用済み切符を上野駅で売りさばいては日銭を稼いでいたとか、熱海や伊豆のあたりまで行くと農家に鍵がかかってないから、こっそり

忍び込んで野菜や穀類を失敬し、闇市で売りさばいた話とかを、かなり申し訳なさそうに、断片的に語っていた。ただ、路上で知り合った仲間達との暮らしは、少年にとって、つらい生活の中でのよい思い出でもあったらしく、めちゃめちゃケンカが強い沖縄拳法の達人の兄さん、どこでも器用に登って行ってしまうような身の軽い子、母親がわりのような少し年かきの姉さん・・・などなど、活劇のように楽しげに語ってくれた。実際にそれがいつの頃のことなのかは判然としないが、終戦時、父は12歳、今の中1くらいである。10代前半の少年にとっては、そんな年上の兄さん姉さん達は、さぞかし心強かったことだろう。ただ年上とはいっても、恐らくはやはり皆親を亡くした未成年だったのではないだろうか。そんな子ども達が、貧しいながらも（そしてやむなく悪さで食いつなぎながら）互いに身を寄せ合い闊達に生き抜いていた姿が想像される。

そんな父でも、当時を語る中で、時々言いよどむことや、ふと翳りをみせることもあった。例えば父のどちらかの足の内股部分には12cmくらいの大きなケロイドがあり、幼い筆者がこれどうしたの、と聞くと、目玉焼きを落とすただの、焼夷弾の破片があたったのだ、毎度言う事が違って、今にして思えば、あまり思い出したくない出来事だったのかもしれない。また、品川あたりで警察に一網打尽にされた（かつ「ブタ箱に入れられた」）ことがあるらしく、このあたりもあまり深くは触れたがらなかった。口ごもり、ややうつむき加減になった顔に、悲しそうな表情が浮かんだことを覚えている。

父はその後、確か目黒と言っていたが、キリスト教の寮に入れられ、「とにかく飯が食えるのが嬉しかった」ようだ。施設の岩風呂に入れる日が楽しみで、岩に背中をこすりつけて垢擦りした、なんて話もしていた。小さい子のめんどうなども結構よくみていたらしい。詳細は忘れてしまったが、その頃、本が好きでしきりに読みふけていた父を、利発な子だと目をかけてくれた人がいたらしく、人より2年遅れとなったが学校を卒業させ、進学をすすめてくれたらしい。

当時の状況の正確なところが知りたくて、少し調べてみたところ、占領期の東京における児童保護に関する藤田の論文¹⁾など、いくつか出て来た。これをみると、終戦後間もない昭和20年10月に、まずは上野で「浮浪児」の收容保護が実施されたようだ。上野を根城にしていた父などは、ま

さにこの「浮浪児」と十把一絡げにされた子ども達の一人に違いない。どうも「浮浪児」達は「收容即逃亡」していたらしく、父も絶対、即逃亡していたクチだろう、などと勝手に想像してしまう。戦後の保護施設の定着プロセスに関する岩田の報告²⁾では、表3において、戦後の「浮浪者」の変遷として、昭和21年～27年の員数が一覧で示されている。この「浮浪者」には若年者も含まれているようなので、「一斉收容者」とされた何千人かの中の1カウントが当時の父である可能性がある。そう思うと、数字の羅列の中に少年の顔が浮かび上がってきて、何とも不思議な感覚に陥る。今まで筆者はほとんど考えた事もなかったが、カウントされる側にいるということは、こういう感覚なのだろう。

さて、ようやく冒頭の学習院の話に戻ってきた。そもそも私立大学など、大変お金がかかりそうなものなのに、何故父は学習院を選んだのだろう。これについて父は、「早稲田や慶應よりも、学習院の奨学金が一番良かった」からだと言っていた。父の見立てでは、「金持ちが多くて、奨学金を申請する人が少ないし、大学に余裕もあったのではないか」ということであつた。そうはいつでもやはり大学にはお金がかかる。一体どうしていたのだろう。残念ながら、そのあたりの話を聞く機会は、結局持てなかった。

*

初夏の日差しに汗ばむ6月、筆者は目白の学習院大学のキャンパスを初めて訪れた。都心のなかにおいて、驚く程高い木々が頭上を覆い、木陰を吹き抜ける風がさわやかで、暑さを忘れることができた。キャンパス内には散策路が整備され、ほどよい距離感で国の登録有形文化財になっている歴史的建造物が散在しており、その解説や地図もたいへんわかりやすいものになっていた。

お目当ての大学史料館展示室はコンクリート建物の1階にあり、展示室の入口では、学生さんが受付をしていた。「戦後学習院の出発」は、戦後の様々な危機を大学としてどう乗り越えて行ったか紹介するもので、コンパクトながら見応えのある展示であった。GHQによる統治下で廃校の可能性のあったところを、当時の院長（＝九大でいうところの総長）が私立大学として存続させることにいかに努力し奔走したか、また、次期院長が、財政難をいかに乗り越えてきたかなどが、パネル解説されていた。・・・ん？財政難？宮内省

管轄であった学習院は、財団法人化し、財産下賜を目指したらしい。しかし承認された額が想定よりも少なかった事や、当時のインフレの影響で、非常に苦しい状況であったようだ。印象に残ったパネル解説は、キャンパスの樹木で作った炭を、給料代わりに支給した、という下りである。そうになると、父が言う程大学に余裕はなかったことになる。とはいえ新生学習院として苦しい財政状況での出発は昭和22年のことであり、父が入学したと思われるのは昭和26～28年頃のことだから、財政難も解消されつつあったのかもしれない。このあたり、具体的にいつごろ、どのように学習院大学の財政難が解消されていったのかは、展示や図録でも取り上げられていない。朝鮮特需やその後の高度経済成長と、日本全体が好景気に向かっていくなかで、徐々に財政難が解消されていったのかもしれない。

よくできた図録³⁾を無料で頂き、外に出てふたたびキャンパス内を散策した。登録有形文化財の木造建築や歴史的建物を見て改めて、戦火を逃れてよくぞ残ったものだと、さらには、学習院大はそれを戦後70年の今までよくぞ大切に守り抜いて来たものだと、感心した。ここまでの高木も、戦火を免れた物であるかもしれない。キャンパスとしてスタートした時期はさほど変わらない九大箱崎キャンパスを思い出し、そこでの建造物や植栽の取り扱いの大きな相違に思いを馳せ、暗澹たる気持ちになってしまった。

*

旧工学部本館1階文書館向かいの掲示板からはじまり、筆は筆者の思いもよらなかった方向にすすんでしまった。しかし、どこかで記しておきたいと思っていた実父からの聞き書きが、アーカイブの殿堂たる文書館にむけた原稿執筆の機会に立ち現れたことは、真珠湾攻撃75年目、そして父がその75年前頃に本来享受されるべき庇護を失い幼いながらも自分の足で生き抜き始めたという節目の年としても、むしろ必然だったのかもしれない。

掲示されている文書館系主催の展示や催事の内容は、近代史や自校史的な内容がほとんどで、今日もそのポスター達は、文書館向かいの掲示板にひしめきあい、しきりに「忘れるな!」「思い出

せ!」「書き留めろ!」と訴えかけてくる。

〈追記〉

文献を探すにあたり、インターネット上にあげられた「浮浪児」に関する様々な記事や記録も目に入って来た。そこには、壮絶で悲惨かつ残酷な状況が記されており、また、戦後の状況を考えれば、想像に難くないものである。遅ればせながら出版書籍を取り寄せ、また関連する学術報告を集めつつ、ゆっくりと読み進めている。

恐らく父も、凄惨な現場に身をおいていたはずなのだが、あえてそこは避けていたのか、あるいは記憶から抜け落ちていたのか、子である筆者には語られず、伝わったのは、小中学生ぐらいの子どもが必死に生きた逞しさである。戦争や国自体への恨みつらみも、ほとんど聞いたことがない。ただ頻繁に、「戦争は、やっちゃいけない」「子どもがかわいそうだからな」と口にしてきた(そんな父の命で、筆者が子どもの頃の我が家では8月15日にいつも、具入りの贅沢なものであるが、すいとんを食べていたものだった)。

父が晩年、一人暮らししていた実家に行ったとき、たまたまアニメの「火垂の墓」を放映していて、父が、丸めた背中を振るわせて、はばかりことなくぼろぼろと涙を流していたことがあった。主人公らの歳の頃や描写が、自分自身やその体験と重なり、身につまされたようだった(そうでもなくとも悲しい話だ)。確か背中の蛆を払うシーンがあり、「本当にこんな感じだった」とも言っていた記憶がある。父が生きていたら、今年で85だった。もっと沢山話を聞いておけばよかったと、後悔している。

〔注〕

- 1) 藤田恭介(2013)「東京都における占領期の児童相談事業及び一時保護事業の変遷」帝京科学大学紀要 9: 133-137.
- 2) 岩田正美(1985)「戦後生活保護法の形成・定着と生活保護施設」社会福祉学 1: 165-193.
- 3) 学校法人学習院編集(2016)『山梨院長50回忌・安倍院長没後50年記念展覧会 山梨勝之進・安倍能成 戦後学習院の出発』32pp.

(九州大学総合研究博物館・准教授)

九州大学セツルメントと吉本清一氏資料

赤 司 友 徳

1. はじめに

昨年（2016年）2月、「九州大学セツルメント」に関する資料が元九大医療技術短期大学部教授で、ご自身もセツルメントに参加していた吉本清一氏のご遺族から大学文書館に寄贈された。吉本氏は1980年12月、九大セツルメントの解散総会にあたって、その案内状のなかで、活動記録を刊行すべく関連資料の寄贈を呼びかけていた。本資料群はその後具体的に編纂が進むなかで形成されていったと思われる。今回吉本氏資料が大学文書館に寄贈されるにあたって、筆者が関わることとなり、大学文書館・医学歴史館の共同事業で資料整理を開始するに至った。予備調査を進める中で、後述のように、吉本氏資料は学生運動史を刷新する可能性を有することを知り、本稿において「九州大学セツルメント」および吉本氏資料の概要を紹介することとした。

2. 九州大学セツルメントについて

九州大学は創立時から地域社会との関係がきわめて密接な大学であり、学生運動も同様であった。九大教養部での激しい反戦運動、60年安保運動と並行してなされた三池闘争等の労働運動、1968年6月の九大構内への米軍機墜落事件への対応などはいずれも市民、学生、大学との連携のもとで行われた。これら学生による運動の中には、セツルメントもあった。

本稿の主題である「セツルメント」とは、19世紀イギリスの大学人によって始められた社会事業で、貧困地区に定住し、診療・保健衛生指導・法律相談、中等教育等の活動を通して地域の生活向上をはかる社会改良運動のことを言う。日本においても関東大震災を契機に、東京帝国大学をはじめ数多くの大学で開始された。

東大の影響を受けて、九大においても1927年に衛生学の太平得三教授が指導教官となり、桜井図南男（後、九大精神科教授）ら医学生によって「九州帝国大学セツルメント」が設立されたが、政府による左傾思想弾圧により実質的に解散した。

1952年8月、公衆衛生学の倉恒匡徳教授を指導教官に、医学部学生同盟が診療活動を開始し、こ



増築中のセツルメントハウス（1956年）

れが母体となって「九州大学セツルメント」が再建された。当初井尻や那珂川沿いで診療を行っていたが、その後福岡市と協力し、堅粕に「セツルメントハウス」を建設、また馬出隣保館の運営委託を受けるなど活動を広げていく。さらに福岡高等栄養学校(現中村学園大学)、福岡女子大学、日赤看護学校などが参加し、通称「福岡セツルメント」とも呼ばれた。この頃から専従医師による診療、学生による地区の乳幼児健診、新聞紙上の法律相談・栄養相談の連載等の事業を展開した。全国組織である「全国セツルメント連合」の結成にも関わり、対外交流も積極的に行った。

1960年代も半ばを過ぎ、インターン制廃止など医学部におけるセツルメント以外の運動が盛んになるにつれ、現役学生の参加は徐々に減少していった。その一方で、セツルメント再建に携わった卒業生が「OS（オールドセツラー）会」を結成し、診療所運営に乗り出すこととなる。しかし九大教養部への機動隊導入を機に、他学部の活動も低調になり、その活動は次第に縮小していった。そして1978年3月にセツルメント活動のシンボルであった「セツルハウス」を市に売却し、1980年末に解散した。

3. 戦後学生運動、セツルメントの研究史

一般に戦後学生運動のイメージと言えば、「東大安田講堂攻防戦」「あさま山荘事件」などメディアに登場するお決まりの映像が象徴するような、



セツルメント診療所 (1953～54年頃)

当時の学生たちの暴力をとまなう狭隘な姿、そして敗北と挫折といったイメージが思い浮かべられる。

確かに、学生運動にはこのような像が長らくつきまとい、それゆえ学術研究の対象から遠ざけられてきた。しかしながら、運動の当事者らが定年を迎え、徐々に記録集や回顧録などを刊行するようになった頃から、本格的な研究が始まった。その代表が小熊英二といえよう。近年は各大学の年史による叙述も増え、社会学等による言説分析や国際比較の研究も進み、学生運動に関する研究は熱を帯びつつある。ただし、これらの研究は全学連に代表されるような反体制・反権力的な政治運動、政治思想の分析に比重を置くため、活動の実態や社会における意義や役割、さらに地域社会との関わりについては未解明の部分も多い。学生セツルメントについても同様である。このような研究史における問題は、大学や公文書館等に学生運動の実態を掘り下げることのできる資料が十分に集積されていないことと無関係ではなからう。

以上のような状況において、九州大学大学文書館では、学生運動に関する資料を学内外問わず幅広く収集し、研究を進めてきた。その結果、他大学にはない豊富なコレクションを有しつつある。その過程で、吉本資料が収蔵されたわけであるが、この資料群からは診療活動、法律・栄養相談、炭鉱労働者支援などを通じて地域社会の改良を行おうとした建設的な学生社会運動という、従来の学生運動のイメージとは異なる姿を読み取ることができるのである。

4. 吉本清一氏資料の概要について

吉本氏資料は現在整理中であるが、その大部分は九大セツルメントが再建された1952年頃から解散した1980年までのもので、およそ1400点にのぼ

る。内容は以下の通り、大きく5つのグループに分けられる。簡単に概要を述べたい。

①九州大学セツルメント全体に関わるもの

定款、会員名簿、総会および常任理事会等の会議資料、会計関係資料など九大セツルメント運営に関わる資料が多く見られる。また福岡の他大学・学校と連携して結成された「福岡セツルメント」に関する同様の資料も含まれている。この他、会議等の際などに記入された日記や日誌、会誌『セツルニュース』、写真や音声テープ（ラベルに「専任教官会議」とあり）などもある。

②セツルメント各部

九大セツルメントは医療部をはじめ調査局、法律相談部、栄養相談部、文化部等から構成された。各部の活動状況が把握できる会議資料、報告書、日誌、会計関係資料、規約、調査票、各部発行の雑誌などが残っている。

③診療所関係

冒頭でも述べたが、九大セツルメントは当初医学生が井尻や那珂町、堅粕などの地域に出かけて健康診断や診療を行っていたが、その後堅粕や馬出の診療所で活動を展開した。経営に関する議論は運営委員会で行われ、それに関する議事録、委員会ノート、堅粕セツルメントハウス建設に関する契約書・図面、診療所閉鎖関係資料などがある。また診療録や各種統計書も見られる。

④全国、他地域に関するもの

全国学生セツルメント連合にも積極的に関わったことから、総会資料や総会に出席するに当たって準備された資料が複数ある。これに関連して「氷川下セツルメント」「亀有セツルメント」「菊坂セツルメント」など東京のセツルメント年史も収集されている。この他、全日本医学生連合九州ブロック（九州医学生ゼミナール）関連資料もいくつか残っている。

⑤OS（オールドセツラー）関係

一般に、セツルメントに入った1年目の者をNS（ニューセツラー）、2年目以降をKS（経験セツラー）、卒業生をOS（オールドセツラー）と呼ぶが、OS会関係資料も多数残っている。九大セツルメントは当初医学生を中心に診療活動に力を入れていたが、自前の診療所を建設し、専従医師を置いた頃から徐々に医学生の参加が減っていく。そのため診療所の運営はセツルメント再建時の学生セツラーによる「OS会」が主体となった。

⑥その他

九大セツルメントは筑豊や三池などの労働運動

にも関与し、抗議運動のみならず労働者たちの健康診断や診療活動を行った。その活動報告書、調査報告書（例えば、『三池部落に於ける人口構成についての中間報告』）なども複数ある。またセツルメント関連の新聞記事切り抜き（ラミネート加工されているものもある）、『九大医報』（旧医学部同窓会誌）の写し、記念誌出版を準備中であったため原稿やゲラも多い。

5. おわりにかえて

本稿では九州大学セツルメントの概要を示し、これに関する資料群である吉本清一氏資料を紹介した。吉本氏資料のように、学生による社会運動の実態を明らかにしうる資料は極めて貴重であり、筆者は本資料群の整理・分析を通して、従来の戦後学生運動のイメージに対し、新たな像を提示し得るのではないかと思っている。また吉本氏資料に加えて、九大セツルメント関連資料のさらなる発掘収集や聞き取りに努めることも重要であるため、関係者の情報提供やご助力を願う次第である。

最後に、戦後混乱期から国民皆保険制度の確立、高度経済成長、戦後学生運動といっためぐりくましく変化した時代を通じて、福岡という地域において有意義な活動をなし、またその活動を後世

に伝える貴重な記録を遺した吉本清一氏に対して心から敬意と謝意を表し、擲筆することとしたい。

《参考文献》

- 安藤丈将『ニューレフト運動と市民社会—「六〇年代」の思想のゆくえ』世界思想社、2013年。
 小熊英二『1968〈上〉若者たちの叛乱とその背景』新曜社、2009年。
 同上『1968〈下〉叛乱の終焉とその遺産』新曜社、2009年。
 折田悦郎・藤岡健太郎・柴多一雄・山本尚史編『聞き取り「九大紛争」—教官・学生の証言—』科研(基盤研究(C))研究成果第1年度(平成26年度)報告書、2015年。
 折田悦郎他編『「九大紛争」資料集—一年表・米国国立公文書館所蔵資料等—』科研(基盤(C))研究成果第2年度(平成27年度)報告書、2016年。
 小杉亮子「テレビに見る1960年代学生運動イメージ—映像アーカイブ調査による1960年代学生運動研究の展開—」『文化』第78巻第3・4号、2015年。
 西田慎、梅崎透編著『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」：世界が揺れた転換点』ミネルヴァ書房、2015年。
 油井大三郎『越境する一九六〇年代—米国・日本・西欧の国際比較』彩流社、2012年。

(九州大学医学歴史館)

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長		副学長	宮本 一夫	委員	芸工院	准教授	Remijn Gerard
委員	文書館	教授	折田 悦郎	〃	薬院	准教授	宮本 智文
〃	人文院	教授	佐伯 弘次	〃	言文院	准教授	岡本 太助
〃	比文院	教授	中野 等	〃	先端研	教授	永島 英夫
〃	法 院	教授	熊野 直樹	〃	生物環境	教授	吉田 敏
〃	シ情院	教授	荒木啓二郎	〃	博物館	館長	吉田茂二郎
〃	博物館	准教授	三島美佐子	〃	総務部	部長	根本 幸枝
〃	韓 七	教授	永島 広紀	〃	理学部等	事務長	白杵 純一
〃	総務部総務課	課長	邊田 憲	〃	図書館	事務部長	木村 優
〃	人文院	准教授	岩崎 義則				
〃	シ情院	教授	瀧本 英二				

(2016年10月1日現在)

九州大学大学文書館名簿

館長		副学長	宮本 一夫	兼任教員	比文院	教授	中野 等
副館長	文書館	教授	折田 悦郎	〃	法 院	教授	熊野 直樹
兼任教員	人文院	教授	佐伯 弘次	〃	シ情院	教授	荒木啓二郎

兼任教員	博物館 准教授	三島美佐子	事務補佐員	川畑 由美
〃	韓 七 教授	永島 広紀	〃	中村 江里
協力研究員	九州大学名誉教授	東定 宣昌	〃	西川 英治
〃	〃	植田 信廣	〃	相良 美里
〃	長崎大学名誉教授	柴多 一雄	〃	木田 貴大
〃	九州大学名誉教授	柴田 篤	百年史専任教員 准教授	藤岡健太郎
〃	福岡市博物館館長	有馬 學	〃 助 教	井上美香子
〃	西日本新聞論説委員	大西 直人	〃 〃	市原 猛志
〃	西南女学院大学教授	新谷 恭明	〃 〃	官田 光史
〃	東京大学教養学部准教授	山口 輝臣	百年史テクニカル・スタッフ	徳安 祐子
〃	九州大学医学歴史館学芸員	赤司 友徳	〃	加藤 絢子
総務課長 (法令審議室長)		邊田 憲	百年史事務補佐員	中村 和泉
テクニカルスタッフ		小野 保和	〃	田籠 亜起
事務職員		岡本 正子		

(2016年10月1日現在)

大学文書館日誌抄録 (2015年8月～2016年8月)

- 8.3 (月) 理学部物理学教室事務室より資料受領。
「九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の評価報告書に基づく取り扱い検討委員会」開催(折田悦郎教授出席。9月3日、10月26日、2016年6月15日も同様)。
- 8.5 (水) 附属図書館との共同事業として、『九州大学新聞』の画像データ公開開始。九州大学医学歴史館運営委員会開催(折田教授出席。11月17日も同様)。
- 8.24 (月) 統合移転推進課より資料調査・打ち合わせのため来館(9月4日、11日、14日、15日、17日、30日、10月2日、9日、14日、16日、19日、11月17日、12月10日、14日、17日、18日、2月8日、12日、16日、18日、19日、23日、3月8日、9日も同様)。
- 9.1 (火) 貝塚地区事務部より資料受領。
- 9.7 (月) 西日本新聞社より電話取材(奥田八二日記の件)。
- 9.14 (月) 川本光治氏(元九大生協専務理事)、学生運動関係資料調査のため来館(17日、28、10月15日、19日、26日、11月2日、5日、9日、12日、19日、30日、12月3日、14日、2月1日、18日、3月7日、28日、4月11日、5月9日、16日、6月13日、20日、7月1日、12日、25日も同様)。
- 9.18 (金) 大学院人文科学研究院名誉教授、資料調査のため来館(24日、10月7日、20日も同様)。
- 9.29 (火) 大学院人間環境学府学生、資料調査のため来館(10月6日、11月12日、12月1日、4日、1月6日も同様)。
- 10.1 (木) 伊都キャンパス椎木講堂にて「九大1968—江上節義・林崎价男の写真で振り返る」展を開催(～30日)。小野寺龍太名誉教授より資料寄贈。
- 10.5 (月) 医学歴史館より資料調査・借用のため来館(11月4日、5日、12月18日、24日、2月26日、3月8日、9日、10日、11日も同様)。
福岡県立美術館より資料調査のため来館(8日、21日、11月2日、12月25日も同様)。
- 10.7 (水) 「九州大学の歴史」(基幹教育総合科目)開講(折田教授)。
- 10.8 (木) 全国大学史資料協議会2015年度総会ならびに全国研究会(於東北大学・東北学院大学)。折田教授、「「戦後70年」と大学史資料—九州帝国大学の学徒出陣—」を報告。
- 10.9 (金) 「戦略的経費等の見直しに当たってのヒアリング」開催(宮本一夫館長、折田教授出席)。
- 10.14 (水) KBC九州朝日放送より電話取材(米軍機墜落の件。15日も同様)。

- 10.15 (木) 国際公文書館会議東アジア地域支部 (EASTICA) 第12回総会及びセミナー開催 (於ホテルオークラ福岡。折田教授参加)。
遠城寺宗近福岡大学教授より資料寄贈。
工学部土木工学科同窓会一同、大学文書館視察のため来館。
- 10.16 (金) NHK福岡放送局、TNCテレビ西日本より箱崎キャンパス内建築物の件につき照会、資料提供。
- 10.17 (土) 林崎价男氏 (元文学部技官) より資料寄贈。
- 10.18 (日) 九州大学箱崎キャンパス近代建築物撮影ツアー開催 (折田教授案内)。
- 10.19 (月) 大濱順彦西南学院大学名誉教授来館、資料寄贈。
慶應義塾大学総合政策学部准教授、大学文書館視察のため来館。
- 10.21 (水) 大学院工学研究院応用化学部門今坂研究室より資料寄贈。
- 10.27 (火) スジャルオ・スカルジョ氏 (農学部卒業、大学院農学研究科修了。インドネシア留学生) を囲む座談会実施 (於大学文書館)。
- 10.28 (水) 神戸新聞社より電話取材 (学徒出陣の件)。
国土社より農学部関係資料の件につき照会、資料提供。
- 10.30 (金) 江上節義氏 (経済学部卒業生)、大学文書館視察のため来館。
- 11.4 (水) 芸術工学部事務部より資料移管 (2月16日も同様)。
- 11.9 (月) 伊都キャンパス亭亭舎・皎皎舎グラウンドオープンセレモニー開催 (折田教授出席)。
- 11.11 (水) 環境安全センターより資料移管。
- 11.12 (木) 附属図書館より資料受領。
統合新領域学府ユーザーサイエンス専攻より資料移管。
- 11.17 (火) 工学研究院材料工学部門より来館、資料寄贈。
- 11.19 (木) 総務部総務課と法人文書移管等の件につき打ち合わせ (26日、1月26日、3月16日、30日、4月14日も同様)。
- 11.24 (火) 塩川郁夫氏 (元医学部附属病院技官) 来館、資料寄贈 (2月3日、4月22日、26日、5月10日、12日も同様)。
工学部等事務部教務課より資料受領。
- 12.7 (月) 成城大学文学部准教授、資料調査のため来館。
折田教授、「総長・理事昼食懇談会」において「九州大学の歴史」を講話 (於伊都キャンパス椎木講堂)。
- 12.10 (木) 『九州大学大学文書館ニュース』第39号刊行。
- 12.11 (金) 九州大学箱崎キャンパス既存樹木取り扱い検討委員会開催 (折田教授出席。1月7日も同様)。
- 12.22 (火) 基幹教育院教授、大学文書館視察のため来館。
- 1.4 (月) 新キャンパス計画推進室より資料受領。
- 1.12 (火) 九大フィルハーモニー会より資料寄贈。
- 1.13 (水) 長崎市役所文化財課より資料調査のため来館 (~14日)。
- 1.14 (木) 北海道大学大学文書館准教授、大学文書館視察のため来館。
国立民族歴史博物館研究部教授、資料調査のため来館 (~15日。2月3日、4日も同様)。
- 1.18 (月) 埋蔵文化財調査室より資料調査のため来館 (4月26日も同様)。
- 1.27 (水) FBS福岡放送より電話取材 (旧航空工学科教室の件。2月10日も同様)。
- 1.28 (木) 総合研究博物館より資料調査のため来館 (2月29日、3月1日、2日、8日、24日も同様)。
- 2.2 (火) 福岡共同公文書館より大学文書館視察のため来館。
- 2.4 (木) 奥田八二元福岡県知事 (元名誉教授) ご遺族、大学文書館視察のため来館。
吉本清一元医療技術短期大学部教授ご遺族より資料寄贈 (25日、3月3日、4月15日も同様)。
- 2.5 (金) 田川市教育委員会より資料調査のため来館。
- 2.8 (月) 早稲田大学大学史資料センターより資料調査のため来館 (~10日)。

- RKB毎日放送よりアインシュタイン来学の件につき照会、資料提供。
- 九州大学野球部より資料寄贈。
- 2.9 (火) 理学部原子核実験室より資料受領。
- 2.15 (月) FBS福岡放送記者、取材のため来館(17日も同様)。
- 2.16 (火) 崇城大学総合教育センター教授、資料調査のため来館(3月1日、24日、4月8日も同様)。
- 2.19 (金) 第25回大学文書館委員会開催。
- 2.22 (月) お茶の水女子大学大学院人間文化研究科教授、大学文書館視察のため来館。
- 2.24 (水) 監査室、産学連携本部より資料移管。
- 2.25 (木) 東京大学文書館より大学文書館視察のため来館。
- 2.29 (月) 文学部日本史研究室より資料調査のため来館(～3月1日)。
- 3.1 (火) 福岡共同公文書館より資料調査のため来館。
- 3.2 (水) 近畿大学(教職教育部等)より大学文書館視察のため来館。
河野正輝名誉教授より資料寄贈。
九大フィルハーモニー会より九大フィル関係資料整理のため来館(30日も同様)。
- 3.8 (火) 企画専門委員会開催(折田教授出席、説明)。
福岡市役所住宅都市局大学移転対策部より資料調査のため来館。
- 3.9 (水) 折田教授、藤岡健太郎准教授(百年史編集室)、井上美香子助教(同)、桂木勝彦氏(大学文書館調査員)、資料調査のため旧農学部附属朝鮮演習林事務所、ソウル大学校学術林、慶南科学技術大学校を訪問(～11日)。
ソウル大学校学術林と「学術林交流ワークショップ」を開催(10日)。
- 3.15 (火) 九州大学病院事務部より資料移管。
- 3.17 (木) 北九州市文化財保護審議委員会より資料調査のため来館。
- 3.18 (金) 中川英二氏(医学部卒業生)来館、資料寄贈。
- 3.23 (水) 九州大学大学文書館看板完成、旧工学部本館玄関に設置。
- 3.25 (金) 第1回「奥田八二日記研究会」開催
- (於大学文書館)。
- 3.28 (月) 科学研究費助成事業基盤研究(C)「金平亮三の教育研究史—標本コレクションと大学文書からの精査」(研究代表:三島美佐子総合研究博物館准教授)と科学研究費助成事業基盤研究(C)「帝国大学農学部の形成と展開に関する研究—九州帝国大学農学部を中心として—」(研究代表:藤岡准教授)の共催により、「科研シンポジウム兼博物館セミナー」開催。折田教授「大学史における記録資料研究の重要性と今後の可能性」、藤岡准教授「九州帝国大学農学部のアジア調査研究」を報告。
- 3.29 (火) 総務部総務課及び法令審議室、地球社会統合科学府より資料移管。
- 3.31 (木) 『九州大学大学史料叢書』第22輯刊行。
名切光子氏(事務職員)退職。
- 4.1 (金) 大学文書館協力研究員、同調査員を委嘱。
協力研究員(～2018.3.31)
東定宣昌名誉教授
植田信廣名誉教授
柴多一雄長崎大学名誉教授
柴田篤名誉教授
有馬學名誉教授・福岡市博物館長
大西直人西日本新聞論説委員
新谷恭明西南女学院大学教授
山口輝臣東京大学教養学部准教授
赤司友徳九州大学医学歴史館学芸員
調査員(～2018.3.31)
中村俊郎氏
桂木勝彦氏
岡本正子氏(前学務部学生支援課、事務職員就任)。
- 4.4 (月) 総合研究博物館、百年史編集室と共催で「九大の歴史を語る什器たち—家具類と食器—」展を開催(於伊都キャンパス椎木講堂。～7月1日)。
熊本大学法学部教授、資料調査のため来館。
- 4.8 (金) NHK福岡放送局より電話取材(1973年度九大入学式の件)。
- 4.12 (火) 「文書記録活動論」(大学院統合新領

- 域学府ライブラリーサイエンス専攻)開講(折田教授)。
- 4.13 (水) 「大学とはなにか」(基幹教育総合科目)開講(藤岡准教授)。
- 4.18 (月) 甲斐正三氏より資料寄贈。
- 4.20 (水) 新採用職員研修の一環として、折田教授「九大の歴史に触れる」を講義(於伊都キャンパスゲストハウス)。
- 4.22 (金) 田園調布学園大学より資料調査のため来館(24日も同様)。
- 4.25 (月) 第26回文書館委員会開催。
経済学部名誉教授、資料調査のため来館(10月7日も同様)。
- 4.26 (火) 企画部統合移転推進課より資料受領。
- 5.6 (金) 岐阜大学教育推進・学生支援機構准教授、資料調査のため来館。
九大生協より資料寄贈。
- 5.9 (月) 川本光治氏への九大学生運動史に関するインタビュー実施(於大学文書館)。
- 5.10 (火) 総合研究博物館より資料調査のため来館(25日、30日、6月7日、8日、10日、22日、23日、27日、7月5日、13日、10月4日、5日、6日、13日も同様)。
- 5.11 (水) 「伊都キャンパスを科学するⅠ」(基幹教育総合科目)の一環として、折田教授「九州大学史と伊都キャンパス」を講義。
- 5.12 (木) 九大フィルハーモニー会より九大フィル関係資料整理のため来館(6月7日、7月26日、8月19日、26日も同様)。
- 5.16 (月) 九大学生運動史に関する座談会実施(於大学文書館)。
- 5.17 (火) 塩川郁夫氏、写真展準備のため来館(6月14日、10月14日、19日も同様)。
- 5.18 (水) 附属図書館より旧農学部関係資料を受領。
- 5.19 (木) 企画部統合移転推進課より資料調査のため来館(20日、6月15日も同様)。
- 5.20 (金) 京都大学大学院法学研究科教授、大学文書館視察、資料調査のため来館(30日、31日、7月20日も同様)。
- 5.24 (火) 福岡市総合博物館より資料調査のため来館(～25日)。
- 5.26 (木) 森山沾一福岡県立大学名誉教授より資料寄贈。
附属図書館利用支援課より資料調査のため来館。
- 5.28 (土) 科学研究費助成事業基盤研究(C)「地域社会と戦後学生運動—九州大学を中心に—」(研究代表:折田教授)と「地域ベ平連研究会」の共催により、学生運動に関するシンポジウム開催。折田教授「<地域社会と九大戦後学生運動>研究における資料収集から」を報告。
- 5.30 (月) 長崎女子短期大学より資料調査のため来館(6月3日、6日、27日も同様)。
- 6.1 (水) 小野保和氏、テクニカルスタッフ就任。
西川英治氏、相良美里氏、木田貴大氏、事務補佐員就任。
- 6.2 (木) 静岡県立大学名誉教授、資料調査のため来館。
- 6.3 (金) 福岡女学院大学より大学文書館視察のため来館(7月11日も同様)。
- 6.7 (火) 九大混声合唱団より資料寄託。
- 6.8 (水) アクロス福岡より資料調査のため来館。
- 6.13 (月) 堀内隆治下関市立大学名誉教授より資料寄贈。
台湾国立政治大学台湾史研究所より資料調査のため来館(20日も同様)。
- 6.15 (水) 統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻受講生、授業(PTLⅡ)のため来館。
新任係長・専門職員級研修の一環として、折田教授「九大の歴史と資料について」を講義(於伊都キャンパスゲストハウス)。
- 6.16 (木) 文学部美学美術史研究室学生、授業(実習)のため来館。
- 6.30 (木) 福岡県立美術館より資料調査のため来館(7月8日、8月3日も同様)。
- 7.6 (水) 医学歴史館より大学文書館視察のため来館。
- 7.7 (木) 学務部学務企画課より資料移管。
- 7.15 (金) 医学歴史館へ展示資料貸し出し。
企画部企画課、総務部総務課、総務

- 部秘書室、総務部同窓生・基金課、総務部法令審議室、学務部基幹教育課、施設部施設企画課、施設部整備計画課より資料移管。
- 新任主任級研修の一環として、折田教授「九大の歴史を学ぶ」を講義（於伊都キャンパスゲストハウス）。
- 7.22（金） 研究推進部産学・社会連携課、病院事務部、貝塚地区事務部より資料移管。
- 7.26（火） 学務部学生支援課より資料移管。
- 東京大学総合文化研究科准教授、大学文書館視察・資料調査のため来館。
- 7.27（水） 学務部学生支援課、監査室より資料移管。
- 7.28（木） 統合新領域学府専攻事務室より資料移管。
- 7.29（金） 筑紫地区事務部、芸術工学部事務部、情報システム部情報企画課より資料移管。
- 8.2（火） 工学部等事務より資料移管。
- 8.3（水） 研究推進部学術研究推進課、附属図書館より資料移管。
- 8.5（金） 地球社会統合科学府等事務部、伊都図書館、農学部事務部、医系学部等事務部より資料移管。
- 8.9（火） 工学部等事務部、国際部国際企画課より資料移管。
- 8.27（土） 文学部同窓会「九州大学箱崎キャンパス学内探訪」開催（折田教授案内・解説）。

百年史編集室日誌抄録（2015年8月～2016年8月）

- 9.9（水） 環境安全センター部局史編打合せ。
- 10.23（金） 第14回百年史編集小委員会開催。
- 12.25（金） 部局史編Ⅱ公開開始。
- 2.25（木） 東京大学文書館より百年史編集室視察のため来室。
- 3.31（木） 芝田政之百年史編集室長、新谷恭明百年史編集委員会委員長・百年史編集室副室長、退任。
- 4.1（金） 玉上晃百年史編集室長、熊野直樹百年史編集委員会委員長・百年史編集室副室長、中野等百年史編集委員会委員長、着任。
- 6.2（木） 第14回百年史編集委員会開催。

九州大学大学文書館ニュース 第40号

発行日 2017年2月28日

編集発行 九州大学大学文書館

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

Tel:092-642-2292 Fax:092-642-7646

Kyushu University Archives

印刷 株式会社ミドリ印刷